

「きみ歌えよ」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 始業式を前に

名指揮者でもある能島先生に誘っていただいたのです。神戸高校合唱部のホームコンサート。今年はずでに香川県で開催される全国総合文化祭への出演を要請されている兵庫県を代表する合唱部のひとつです。これまでの仕事柄、そのステージは何度も見せてもらっていましたが、本校講堂を利用して、先輩たちと繰り広げるプログラムは当然ながら見たことがありません。私は興味津々でした。



果たして当日は無伴奏混声合唱あり、ミュージカルあり、大久先生が歌うシーンありと、バイタリティを見せつけてくれました。念願の関西大会突破に向けて、よいスタートですね。私はその余韻の中で8日の始業式の式辞原稿を少し軟らかめに変えました。格式が必要な入学式の式辞との差別化をはかりたくなったのです。

○ 始業式で生徒に伝えたこと

桜の季節なので、まずは桜の話から入りますね。

桜は満開となったあと、華々しく散ります。そのあと、夏には花の芽を作ります。その花の芽ですが、ある程度まで成長すると、冬の初めにはいったん眠りに入るそうです。成長も止まります。そうして、しばらく休んだあと真冬の寒さによって眠りから、ふっと目を覚まします。これが「休眠打破」です。

目覚めた花の芽はその後、春の暖かさとともに再び成長を始め、やがて開花します。桜はどこか私たち人間と同じなのかもしれませんね。

花を開くために、まずは夏の暑い日に自らを鍛えるのです。勉強でも部活動でもそうですよね。しんどい思いをしないで成長することなど不可能です。でも、ある程度まで成長したら、そこで休眠する、つまり休むことも必要なのです。そのうえで、しっかりと厳しい冬の寒さ、つまり思い通りにいかないことを経験して目が覚め、そこで一気に花を咲かせることができるそうです。

鍛えないと人は強くなれません。でも、たまには休まないで心が折れてしまいます。「自分は弱いな」「あいつには適わないな」そう思うことは大切です。でも、それで落ち込む必要はありません。最終目標は自分らしい花、自分にしか見せられない花を咲かせることなんです。長い目で見て、それぞれがいつか花を咲かせられるように。

これこそが本校の前身である神戸尋常中学校時代から引き継がれてきた「鍛錬主義」のめざす姿だと思います。やがて咲き誇る日のために、ひとりひとりがしっかりと「進化をめざしてもらえたら」それが私から皆さんへのひとつのお願いです。

ふたつめです。今、グローバル化や技術革新の進展など、時代は激しく変化しています。また、多発する自然災害や地球温暖化、国際情勢の不安定化についても日々、報道がなされています。あふれる情報を耳で聞き、あるいはあふれる映像を目にして、皆さんは何を思いますか。「大変だな」「この先はどうなるのだろう」という感想だけでしょうか。

今、世界は解決しなければならない様々な課題に直面しています。やがて皆さんは、それぞれの立場でこれらの解決を担う世代となるでしょう。そのために今が力を蓄える時です。しっかりと学び、しっかりと人格を磨き、



社会の第一線に躍り出たときには十分な力を発揮できるよう、成長するべき時は今です。ここに皆さんが神戸高校で学ぶ意味があります。学ぶのは自分のためであり、社会をよりよくするためでもあるのです。

そこで近年、私が気になっているのは人と人の分断です。世界のいたるところでこの分断が見られます。自分の意見に固執する人が多いため、ひとつの結論にたどり着くことができない、かくして分断は混乱を招きます。そのようなとき、求められるのは誰からも認められるリーダーの存在ではないかな、そう思っています。

では、具体的にリーダーの資質とはどのようなものか。何より大切なのは人間的魅力です。「この人とともにありたい」そう思わせる安心感です。そこで覚えておいてほしいのは、これまた本校の前身、神戸尋常中学校から引き継がれてきた四綱領のなかの「自重自治」の精神です。

「自重自治」とは自らの使命を重んじ、品性を保ち、自らの定めによって自らの行為を律することを言います。自らのやるべきことに真摯に取り組み、私利私欲に走ることはなく、常に自分がどのように見られているかを意識して行動できる存在。そんなリーダーは人と人を繋ぐ存在となり得るでしょう。実に魅力的です。

皆さんには、そのようなリーダーとなれるよう、「しっかりと人格を磨く」日常を過ごしてもらえたらうれしいな、そう思っています。これが2つ目のお願いです。

最後のお願いはいたってシンプルなものです。「自分の生命と他人の生命を大切にしてください」ということです。私がかつて働いていた教育委員会では、県立高校生の誰かが生命を落とすと、必ず連絡が入ってきました。亡くなった生徒の日常を私は知りません。それでも哀しくなるのが常でした。では、そのそばにいた友人は何を思うでしょう。育ててきた保護者の方は何を思うでしょう。

自分の生命と他人の生命と同様に大切にしてください。これが3つ目のお願いです。「しっかりと進化をめざす」「しっかりと人格を磨く」そして「生命を大切にする」。私からのお願いは以上です。

午後からの入学式では、同じ内容を少し格式高くして仕上げ、新1年生に伝えました。式典中の校歌が実に素晴らしく、来賓としてご出席いただいた同窓会長からは「声も出ているし、とてもきれいに歌えていて感動した」とのお言葉もいただきました。歌唱指導にあたってくださったメンバーに大感謝ですね。



文化部による歓迎演奏は来客対応があり、電子オルガン部の演奏は残念ながら少ししか見られませんでした。吹奏楽部はじっくり見させていただきました。歌ありダンスありの迫力あるステージ。指揮者が講堂後方から指揮するというスタイルも新鮮でした。

式の後には学年主任の榎本先生から保護者の方に「比べないであげてください」というお話がありました。友人や兄姉、くわえて過去の本人と。おそらく多くの1年生がこれまでエース級の活躍を見せていたことでしょう。それでもエース級ばかりが集まると、その中で1番もあれば300番もあります。平均点を下回るテストに落ち込むこともあるでしょう。そんなとき、支えてくれるのは先ずもって、ご家族のご理解ですものね。

保護者の方も聞き入っておられました。さらに榎本先生からは、「私が信頼できる仲間が集まっている学年団です。どうか信頼してください」という話もありました。その思いも届いたことと思います。

○ 『きみ歌えよ』

すべてが終わった後、私の脳裏に浮かんだのは、冒頭に書いたホームコンサートの日のことです。あの日、演目が終わって講堂を出ると、背後から歌声が聴こえました。合唱部の生徒がバルコニーから歌声で見送ってくれていたのです。曲は谷川俊太郎の詩にメロディをつけた『きみ歌えよ』。

哀しいことやつらいこともあれば、うれしいことも好きなこともあります。その折々の思いを洗いざらい歌えば、誰かと思いを分かち合える、という詩です。『そんな高校生活が待っていますように』、1人そう祈った私です。

